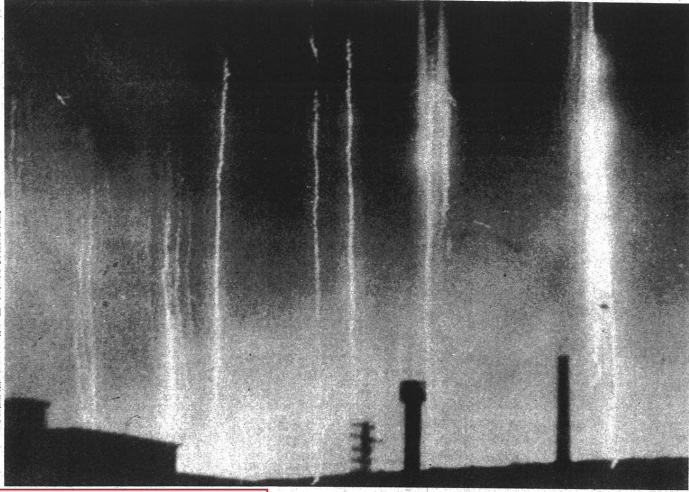


まぶたに残る猛火 今も



九州大学医学部の西面方向の空襲被害の様子

福岡大空襲から75年

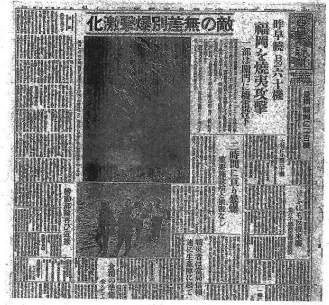
1945年6月16日夜から20日未明にかけて、福岡市上空に米軍のB29超重爆撃機が飛来し、焼夷弾を投下した。福岡大空襲。同日の西日本新聞は「市、ついに敵の無差別襲撃」と大々露出を賜ったが、

多くの記事は「重要施設ほとんど被害なし」心配なし衣食住、大空襲は健在なりなど、市民の戦意消沈、戦心の醸成に重きを与えていた。福岡市史によると「死者92人、行方不明者44人」とあるが、被害の全容は

本紙のデータベースに海客資料手帳には延べに包まれた博多方面や、焼け野原となった市街、と並べられた市街の惨状が伝えている。福岡市史によると「死者92人、行方不明者44人」とあるが、被害の全容は

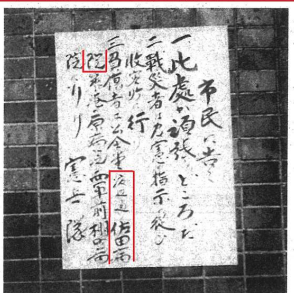
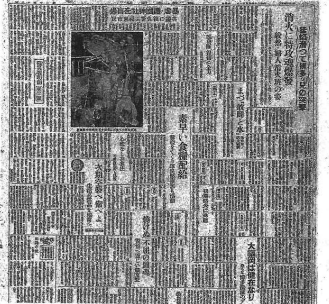
解明されていない。75年が過ぎた。しかし、襲撃の下の逃げ惑った人々のまぶたには、今もあの日の光景が残っている。

(福岡県)



福岡大空襲を報じた1945年6月21日付の西日本新聞1面と2面

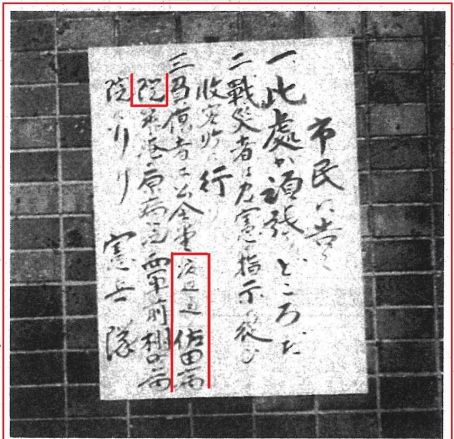
本紙ウェブサイトでは、1945年夏の「きょう」に西日本新聞が掲載した記事を毎日紹介する「あの日、何を報じたか」を連載しています。こちらのQRコードから読むことができます。



焼け跡に張り出された憲兵隊の告示。「市民に告ぐ。ここが頑張りどころだ。戦災者は官憲の指示に従い収容所に行け。負傷者は公会堂、渡辺通の佐田病院、薬港の原病院、西軍前棚町病院に行け」とある



大造の東中線が焼け落ちたため、すぐ下流の水運管橋を渡る市民たち。右後ろの建物に原爆テロ



焼け跡に張り出された憲兵隊の告示。「市民に告ぐ。ここが頑張りどころだ。戦災者は官憲の指示に従い収容所に行け。負傷者は公会堂、渡辺通の佐田病院、薬港の原病院、西軍前棚町病院に行け」とある

